

●「生理学教育を語る会」報告

日本生理学会大会中、生理学教育に関するセッションは教育委員会主催の教育シンポジウム以外にはほとんどないのが現状である。そこで生理学教育を語り合う場を増やすため、松尾 理（近畿大学医学部第2生理）と渋谷まさと（昭和大学医学部第2生理/医学生理学教育シェアリンググループ）が世話人となり、「生理学教育を語る会」を大会第2日の平成18年3月29（水）午後7時～10時、前橋東急インで開催した。当日、大会参加者のうち26名が参集した。松尾世話人から開催の趣旨が述べられ、全員が自己紹介した。会食の後、4つのグループに分かれ、討議した後代表者が討議内容を発表した。

1班

コア・カリキュラムにより、「統合」されたことになっていても、臓器ユニット間の結びつきに関する教員間での調整が不十分である。また、毎年カリキュラムが少しずつ変わり、対応しきれない。更に、低学年では、入試の受験科目により、物理、化学、生物などの理科系基礎科目の内容が分かっていないことがあり、（義務教育でやっているはずの）オームの法則すら分かっていない学生がいることもまれなことではない。到達目標を明示するだけでなく、学び方を教える必要があるが、現在、提示されている多様なアプローチのうち、何がベストかはわからない。

2班

成績の悪い学生に対する取り組みには悩まされることが多い。厳しく不合格にしてしまうべきだが、高学費などの経済的問題が生じる場合、悩まされてしまう。また、評価方法が問題であり、エビデンスのある評価方法を知りたい。カリキュラムに関する教員間の連絡がより必要である。

3班

（本大会中のモデル講義の一つである「浸透圧調節」の授業のように）基礎から提示し、その後で臨床的問題が提示されるのと、逆に、（同、「むくみ」の授業のように）臨床的問題が提示された後で基礎が提示されるのでは、どちらがいいのかが話し合わ

れたが、（当然のことながら）結論に至らなかった。いずれにせよ、最近の学生さんは、目が肥えていて、カラーのイラストを提示した程度ではだれも感動してくれない。動画が必要である。国試予備校の方がわかりやすい、という意見も多いが、一通りわかっている学生用であり、序論や導入の解説、研究との繋がりなどは聞けない。

4班

チュートリアル教育の導入についての意見交換が行われた。自学自習の態度および問題解決能力を身につけ、しかも、医師に必要なコミュニケーション能力を養うことが必要であることは理解できるが、チュートリアル教育を成功に導くためには多くのチューター養成が不可欠で、そのマンパワーの確保とチューター養成・指導の方策がチュートリアル教育の導入を困難にしているとの指摘もあった。

また、マレーシア大学生理学教授のCheng博士が参加し、アジア医学生理学クイズ大会が開催されていることが報告された。是非、日本からも医学生が参加出来るように、生理学会会員の先生方に検討いただきたいとリクエストされた。3人1チームの勝ち抜き戦であり、トップレベルで英語が堪能な学生が、このクイズ大会を目標に半年ほど生理学を真剣に勉強すれば、1-2回戦、勝ち抜くことも十分可能と思われる。選考の上で生理学会として旅費をサポートできるならば、学生は履歴書の「賞」に記載もできるわけであり、強い参加意欲が期待できる。

このように、急遽の開催であったにもかかわらず、参加された先生方の活発な討論のお陰で充実した会となった。他大学の教育現状をフランクに語りあえる場は必要であり、この会で築き上げられたネットワークを通じて、よりよい医学教育あるいは生理学教育の改変が成し遂げられるであろうと印象づけられたとの意見も多かった。来年も開催する予定であり、さらに多くの出会いと語り合いとが期待される。

松尾 理
渋谷まさと